

地球環境について考えよう

人間社会の在り方そのものを変える大転換期に来ている

【機関紙JAM・2023年9月25日発行 第296号】

この夏はこれまでにはない猛暑の日々が続いた。今年7月の平均気温は「25.96度」、8月は「27.84度」と日本の観測史上で最も暑かったと気象庁は発表した。6月も過去2番目の暑さになったことから2023年は「過去最も暑い夏」となった。気象庁は、「地球温暖化に加え、太平洋高気圧の勢力が強かったことなど、気温を上昇させる多数の現象が6月から8月に切れ間なく続き、記録的な暑さとなった」と説明している。

地球温暖化の原因は、明らかに化石燃料を燃やすことで出る温室効果ガスによるものだ。実際、ビル、工場、道路、農地、ダムが地表を埋めつくし、海洋にはマイクロ・プラスチックが大量に浮遊している。人間自身が作った「人工物」が地球を大きく変えているのだ。とりわけそのなかでも、人類の活動によって飛躍的に増大しているのが温室効果ガスの一つである「二酸化炭素」である。1992年に採択された国連による気候変動枠組条約では「大気中の温室効果ガスの濃度を安定化させる」と謳っているが、30年以上経った今も排出量は増え続けている。2022年にはエネルギー関連の二酸化炭素排出量は世界全体で過去最高の年間約368億トンになった。排出量の8割を占めるのが、日本や中国、米国などを含む主要二十カ国・地域「G20」だ。ここでは産業革命前からの気温上昇を1.5度に抑える目標を掲げている。国連のグテーレス事務総長は、「G20」は気候変動対策と気候正義のために踏み出す必要がある」と指摘し、「もはや地球温暖化ではなく、地球が沸騰している」と述べたことはうなずける話だ。このことは人間が、構築してきた社会システムが地球のシステムと合わなくなってきたことを示している。今年7月に地質学者たちが人新生の時代の始まりを1950年代にすることを提案した。

ノーベル化学賞受賞者のパウル・クルツェン氏は、人類の経済活動が地球に与えた影響があまりに大きいため、地質学的観点から地球は新たな年代に突入したと言い、それを「人新生」と名付けた。人間たちの活動の痕跡が地球の表面を覆いつくした年代という意味だ。

人新生は終わりの始まりなのかもしれない。人間と地球の関わり方、人間社会の在り方そのものを根本から考え直さなくてはならない大転換期に来ている。

わたしたち自身がつくってきたこの地球を、子や孫、さらにはその次の世代へと引き継いでいかなければならない！

書記長 中井 寛哉